＜令和 6 年度公益財団法人青森学術文化振興財団助成事業＞

青森県における文化遺産の保全と活用

長岡　朋人

2021 年に北海道・北東北の縄文遺跡群は世界遺産に登録された。2024 年には青森市に縄文遺跡群情報発信拠点施設「じょもじょも」が設立され，縄文遺跡の魅力を伝える出土品や映像を通して観光客に情報を提供する場が整備された。青森県は縄文遺跡を代表として世界に誇る文化遺産を有しており，近年では縄文遺跡の価値を高めようという動きは顕著であるが，現在の教育・研究・普及は十分のものであろうか。

青森県では縄文遺跡は情報発信や一般への啓蒙活動に注力している点は注目されるが，下記の理由から縄文遺跡の価値を十分に引き出すには至らない。第一に，縄文の研究は近年大きく進展しており，縄文の魅力発信は日々更新される研究を踏まえた活動であるべきである。縄文時代の世界観は過去数十年に変化してきたが，今回国内外の先行研究を踏まえた動向を後述する。第二に，縄文遺跡の魅力発信の手法は適切かという点である。発信のほうに主眼が置かれて，メッセージ性が乏しい現状を危惧する。縄文遺跡のアピールを見ていても，そこには意外性がなく，世界の考古学の現状から取り残された縄文観（縄文時代を理想郷とした縄文至上主義）に終始する可能性がある。縄文文化は他の時代や文化と比べて優れているという面を強調する姿勢は現代の物差しで過去を判断するという後付けの説明である。第三に，海外の訪問者や専門家を含めて，青森県に訪問する多様な人々に向けた魅力発信であるかという課題である。縄文研究の情報を更新され続けなければいけないが，それがなければ専門家の人から振り向かれない可能性がある。以上から，文化遺産に関する先進的研究の推進と地域への還元は急務である。遺跡や文化財に関わる地域おこしは SNS を通じたアピールが多いが，世界に誇るべき研究成果を生み出す土壌がなくては将来を見据えた活動へつながっていかない。研究活動による先進的な知見と次世代を担う世代への教育が優先されるべきである。

本研究では，東京では東京大学・国立科学博物館等，仙台では仙台市科学館・東北歴史博物館・震災遺構荒浜小学校等を見学し，青森の文化遺産や伝承の保全・研究に関する問題点の調査を行った。結果，青森県の文化遺産の多くは東京等の県外に移動し，地域の人々が地元でその価値を理解する機会が失われているという問題点，博物館が極めて少ないため文化遺産や伝承の保全の機運に恵まれていないという問題点が浮き彫りになった。これは文化遺産だけではなく，過去の災害の記憶が失われていく課題も伴っており，防災という現実的課題にも直結する重要な課題である。